

## 審査意見への対応を記載した書類（8月）

（目次）生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻（D）

### 【大学等の設置の趣旨・必要性】

#### 1. <生涯スポーツ学と教育研究課題等の整合性が不明確>

研究科名や専攻名に掲げる「生涯スポーツ学」の下、「冬季スポーツのアスリート支援に関する課題」を教育研究課題の一つとして設定し、教育課程においても「スポーツ科学研究分野」の専門科目に関連する科目を配置しているが、本研究科における「生涯スポーツ学」の定義が明らかでなく、それらの説明が整合するものか不明確である。また、修士課程（生涯スポーツ学専攻）における教育課程との連続性も不明確である。このため、本研究科における「生涯スポーツ学」の定義を明らかにした上で、本専攻において設定した各課題及び研究分野、修士課程（生涯スポーツ学専攻）の教育課程が整合することを明確に説明すること。さらに、本課程における養成する人材像や3つのポリシー、教育課程との整合性についても併せて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・・・・・・・・1

#### 2. <学生確保の見通しが不明確>

長期的かつ安定的な学生確保の見通しについて、以下の点を含めて、改めて明確に説明すること。

（1）学生確保の見通しを説明する根拠の一つとして、本課程への進学に関するアンケート調査結果を挙げているが、当該アンケート調査において「進学可能性時期」に係る設問があるにも関わらず、一切分析に活用がされておらず、長期的かつ安定的な学生確保の見通しがあるとは判断できない。（是正事項）・・・・・・・・・・9

（2）既設の生涯スポーツ研究科修士課程及び生涯学習学研究科修士課程の修了者における本課程への進学需要が高いとの説明がなされているが、他大学への博士課程進学率が著しく低いことに鑑みると、どの程度期待できるか疑義がある。（是正事項）・・・・・・・・11

（3）本課程の基礎となる同修士課程の入学生の約半数が社会人であることを説明しているが、本課程への社会人の入学需要に関する具体的な根拠が示されていないため、社会人学生の確保の見通しが不明確である。（是正事項）・・・・・・・・・・12

（4）人材需要の動向について、客観的な根拠が示されておらず、本課程で養成する人材に対する社会的ニーズがあるか判断できず、定員設定の妥当性も不明確である。

（是正事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

## 【教育課程等】

### 3. <教育課程が不明確>

教育課程について、審査意見1の対応を踏まえ、以下の点を明確に説明すること。

(1)「スポーツ科学研究分野」及び「生涯スポーツ学研究分野」を本課程での教育研究上の特色に掲げているが、本課程の修了要件を見ると、両分野から1科目2単位を選択するのみとなっており、このような教育課程でディプロマ・ポリシーを達成し、養成する人材像にかなう人材を養成できるのか疑義がある。このため、養成する人材像、ディプロマ・ポリシーに照らして、教育課程の適正性を明確に説明すること。(是正事項)・・・・・・・・・・27

(2)「スポーツ科学研究分野」及び「生涯スポーツ学研究分野」の各科目について、いずれも科目名に「特殊研究」と掲げているが、具体的に何が「特殊」なのか不明確であるため、明確に説明すること。また、各科目における「研究」に関する講義内容のレベルにばらつきが見受けられ、一貫性のある教育が実施されるのか疑義があることから、各科目の講義内容の適正性について明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

(3)シラバスの「成績評価の方法」について、例えば、「スポーツ生理学特殊研究」における「実技試験」や、「スポーツバイオメカニクス特殊研究」における「作品評価」など、具体的な内容が不明確なため、当該科目の評価方法としての適正性が判断できない。また、「その他」の具体的な評価内容も不明確である。このため、評価方法の具体的な内容を明らかにした上で、各科目の評価方法としての適正性について、明確に説明すること。

(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

(4)「健康運動科学特殊研究」のシラバスの「その他」に記載されている「被験講義」がどのようなものか不明確なため、明確に説明すること。(是正事項)・・・・・・・・・・38

### 4. <研究科委員会規程に齟齬(そご)>

博士論文の可否判定については、研究科委員会で行うこととなっているが、研究科委員会規程における本委員会の審議事項に記載がなく、齟齬(そご)がある。このため、研究科委員会規程を適切に改めること。(是正事項)・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

## 【名称、その他】

### 5. <英語能力判定の位置付けが不明確>

入学者選抜で求める英語能力の判定について、「TOEICまたはTOEFLのスコアから判定する」とのことだが、新たに学力試験を実施する計画ではなく、アドミッション・ポリシーに英語能力に係る記載がないことに鑑みれば、出願時点で一定水準のスコアを有することを受験

資格として求めているようにも見受けられる。このため、当該判定が、入学者選抜における受験資格として受験者に求めるものなのか、選考方法の一つとして設定されたものなのか明確に説明すること。また、英語スコアが受験資格である場合は、具体的な水準を明示すること。(是正事項) . . . . . 40

6. <機器備品の利用計画が不明確>

本学が既に整備している、多用途筋機能評価運動装置をはじめとした機器備品について、既設の学部や修士課程との共用の有無など、本課程の教育研究上支障のない利用計画となっているか明確に説明すること。(是正事項) . . . . . 42

7. <学位名称の適正性が不明確>

学位名称について、日本語名称を「博士(スポーツ科学)」、英語名称を「Doctor of Philosophy」としているが、修士課程の学位名称がそれぞれ「修士(スポーツ科学)」、「Master of Sport Sciences」となっていることも踏まえ、その適正性について明確に説明すること。

(是正事項) . . . . . 44

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

1. <生涯スポーツ学と教育研究課題等の整合性が不明確>  
研究科名や専攻名に掲げる「生涯スポーツ学」の下、「冬季スポーツのアスリート支援に関する課題」を教育研究課題の一つとして設定し、教育課程においても「スポーツ科学研究分野」の専門科目に関連する科目を配置しているが、本研究科における「生涯スポーツ学」の定義が明らかでなく、それらの説明が整合するものか不明確である。また、修士課程（生涯スポーツ学専攻）における教育課程との連続性も不明確である。このため、本研究科における「生涯スポーツ学」の定義を明らかにした上で、本専攻において設定した各課題及び研究分野、修士課程（生涯スポーツ学専攻）の教育課程が整合することを明確に説明すること。さらに、本課程における養成する人材像や3つのポリシー、教育課程との整合性についても併せて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

本学大学院（博士後期課程）での生涯スポーツ学研究科の教育研究課題の整合性について指摘があった部分について、以下の修正加筆を行った。

#### 1) 生涯スポーツ学の定義について

生涯スポーツ学研究科（修士課程）での生涯スポーツの教育研究内容との連続性と、本研究科（博士後期課程）での「生涯スポーツ学」の定義を明らかにした。

これまで、日本において、今日ある生涯スポーツ活動の基本的な考え方は、1960年代から始まった人の生涯にわたる継続的な教育や学習活動の在り方を骨子とした生涯教育の提唱に端を発している。「生涯スポーツ」の定義の始まりは、平成9年の保健体育審議会の答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」で明らかにされた。その答申では、豊かなスポーツライフの指針で、各ライフステージで実施されるスポーツライフのポイントや運動スポーツの楽しみ方について明らかにされている。ライフステージ区分では、乳幼児期から老年期後期までのおおむねの年齢区分ごとに、各ステージでの運動・スポーツ活動の在り方が明示され、そこには青少年期前期・後期における可能性に向かって挑戦する競技性を伴うスポーツ活動の実施についても含まれている。これまでの社会体育や学校体育、さらには大衆スポーツと競技スポーツなどが別々に論議されてきた経緯から、人のライフサイクルに応じた運動・スポーツ活動の継続性の重要性の観点に立った画期的なスポーツ振興の考え方の転換が見られた。そうした考え方は、その後の我が国のスポーツ振興の骨幹にある「生涯スポーツ社会の実現」の提唱と深く関わってきている。この答申で明らかにされた生涯スポーツ振興の考え方は、各ライフステージでのスポーツ振興という形で、スポーツ振興基本計画（平成12年）に具現化され、今日のスポーツ基本計画（平成24年）と第2期スポーツ基本計画（平成29年）に至っている。

これらの政策内容を見る限りにおいて、本学大学院（修士課程）で示されている生涯スポーツの取り扱う対象を「生涯にわたる各ライフステージにおいて、個人の興味・関心・年齢・体力等に応じて実施するスポーツ活動」とし、老若男女を問わず、また、健常者や障がい者を問わず、生涯にわたる各ライフステージで実施される広範多岐な人の運動・スポーツ活動

を対象にした生涯スポーツ学の基礎的かつ実践的な教育研究を主眼にしていることは、これまでの生涯スポーツの概念規定をめぐる研究者の論議結果を見ても妥当性をもった内容となっている。

さらに、本学大学院（博士後期課程）の研究目的にある「生涯スポーツ学」の定義に関して、その学術研究団体である日本生涯スポーツ学会（平成11年発足）の研究内容から見ると、学会が創設されて以来、今日まで、その学会大会での発表や学術雑誌の内容からその特徴が見られる。すなわち、研究の多くが上記の多様な生涯スポーツ活動を対象とした、自然科学から人文・社会科学の多様な研究分野からの実践的かつ応用的な研究の蓄積がなされてきている。また、その研究手法もそれぞれの研究者は専門的研究分野を基礎としているものの、他領域の研究者との共同で、独自の研究法の応用や成果の検証を実施するなど、いわゆる学際的研究が実施されてきている。それらは、研究の主目的が実践現場の問題解決や政策提言への貢献が重要視されていることが特徴とみることができる。これまで生涯スポーツ振興が提唱される前には、学校以外の運動・スポーツ活動は社会体育の概念の範囲で、主に、日本体育学会での体育社会学専門領域や体育経営管理学専門領域などで政策・集団・指導者・施設などをテーマとして研究が蓄積されてきた。しかしながら、高齢化や子どもの体力低下などの社会背景の変化とともに、あらゆるライフステージでの健康づくりを含む生涯スポーツ振興が重要視されるようになり、そこで取り扱う運動・スポーツ活動は多様性を帯び、かつ、そこでは、細分化された学問領域を実践的かつ応用的に問題解決が可能な研究デザインとしての学際的アプローチの有効性が示されるようになってきた。

そこで、本学の博士後期課程では、生涯スポーツ学の定義として「人の生涯の各ライフステージで継続的に実施され、様々な目的や興味・関心に基づいて行われる運動・スポーツの諸現象に対して、自然科学から人文・社会科学にわたるスポーツ科学の学際的研究アプローチによる基礎的・応用的・実践的研究」とし、現場の問題解決にスポーツ科学の有機的な連携を図るための高度な研究能力を育成することを骨子としている。言い換えれば、これまでのスポーツ科学の学際的研究による運動・スポーツ現場への問題解決と、そのための高度な研究能力をもった有為な人材を育成することが、今後の豊かな生涯スポーツ社会の構築のためには急務であると考えらえる。

また、本学が位置する寒冷地としての地域特性を鑑み、通常温暖な地域で実施される運動・スポーツ活動に加えて生涯スポーツとして競技性を含む冬季スポーツや過疎化と高齢化が急速に進む環境下での健康づくりや生涯スポーツを研究対象とすることも本課程のオリジナリティとして位置付けられる。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 1)

新	旧
<p><u>文部科学省が平成 24 年に策定した「スポーツ基本計画」では、スポーツの果たす役割を踏まえ「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」を創出するため、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」を基本的な政策方針とした。さらに、平成 29 年に策定された「第 2 期スポーツ基本計画」では、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を好機として、「スポーツ参画人口を拡大し、スポーツ界が他分野との連携・協同を進め、一億総スポーツ社会を実現する」ための具体的な政策目標が提示されている。こうした国の政策実現に貢献し得る研究の蓄積と有為な人材の養成を目指すことは高等教育機関として重要な社会的ミッションであることは言うまでもない。</u></p> <p><u>そのため、本学「大学院生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻修士課程」では、生涯スポーツを「生涯にわたる各ライフステージにおいて、個人の興味・関心・年齢・体力等に応じて実施するスポーツ活動」と捉え、老若男女を問わず、また、健常者や障がい者を問わず、生涯にわたる各ライフステージで実施される運動・スポーツ活動を対象にした生涯スポーツ学の基礎的かつ実践的な教育研究を行うことを目的としている。具体的な研究対象は、幼年期における幼児体育、青少年期から成人期にかけての学校体育や競技性の強いスポーツ、壮年期から中年期・老年期における健康づくりや生きがいづくりを目標とした運動・スポーツ等を幅広く扱ってきている。研究分野は、スポーツ科学、健康科学、教育学などの 3 分野からのアプローチによる研究を目指してきている。</u></p>	

さらに、「大学院生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程」では、生涯スポーツ学を「人の生涯の各ライフステージで継続的に実施され、様々な目的や興味・関心に基づいて行われる運動・スポーツの諸現象に対して、自然科学から人文・社会科学にわたるスポーツ科学の学際的研究アプローチによる基礎的・応用的・実践的研究」と定義し、それらを実施することにより、高度な専門的研究者や高度職業人（指導者）を養成することを設置の趣旨の骨子としている。具体的には、運動・スポーツに関する医学・生理学・バイオメカニクス・リハビリテーション学・栄養学・心理学等を主軸とするスポーツ科学研究分野と、生涯スポーツ学・老年学・健康科学・コーチ学・教育学等を主軸とする生涯スポーツ学研究分野による研究の専門化と融合を図り、それらの学際的連携から生涯スポーツ学研究の高度化と専門性の深化を達成することを重視している。

## 2) 修士課程（生涯スポーツ学専攻）における教育課程との連続性について

修士課程（生涯スポーツ学専攻）においては、生涯スポーツの振興に向けて実践能力と研究能力を有し、指導的役割を果たす人材養成を行うことを目指し、入学生の研究の多様性や修了後の就職希望を踏まえ、幅広い教育研究分野を構成し、「スポーツ科学教育研究分野」、「応用健康科学教育研究分野」、「スポーツ教育学教育研究分野」の3分野から教育課程を構成した。

博士後期課程では、生涯スポーツ分野の運動・スポーツの諸現象に対して、スポーツ科学の専門的分野の研究能力を持ちつつ、さらに学際的研究アプローチによる応用的・実践的研究を構築できる研究者や高度職業人（指導者）を養成することを目的としている。そのためには、複眼的視野で全体像を把握し、学際性・専門性をさらに先鋭化するために、領域を細かく細分化することを避け、「スポーツ科学研究分野」と「生涯スポーツ学研究分野」の2分野とした。修士課程における教育課程との連続性について、資料25を用いて、以下のように記載した。

博士後期課程の「スポーツ科学研究分野」では、冬季スポーツにおける競技者育成やトップアスリートのサポートを主な研究対象とする。この研究分野には、修士課程の「スポーツ科学教育研究分野」のトレーニング科学、スポーツバイオメカニクス、アスレティックリハビリテーションなどに加えて、「応用健康科学教育研究分野」のスポーツ・運動に関する医学、生理学、栄養学、心理学の専門性を合わせることで、より複眼的な視野や研究能力を高度化・深化させることが可能となる。

博士後期課程の「生涯スポーツ学研究分野」は、冰雪寒冷圏域の特殊性を鑑みた生涯スポーツの推進、健康づくりを主な研究対象とする。修士課程における「応用健康科学教育研究分野」の健康運動科学、老年学、休養・睡眠学と、「スポーツ教育学教育研究分野」の冬季スポーツ指導、ジュニアスポーツ指導、学校体育、コーチング学を「生涯スポーツ学」という大きな専門性のなかにまとめ、より複眼的な視野と研究能力を高度化・深化させることを可能とした。

以上の2分野構成により、修士課程の各専門分野で研究活動と研究方法論の基礎を習得した大学院生が、博士後期課程ではその研究能力を高度化・深化させることが可能となり、ディプロマ・ポリシーに掲げた「高度な専門的知識を修得し、課題設定能力、科学的分析能力、情報発信能力を備え、研究成果が国内外で認められ、当該分野で指導的な役割を担える人材」の養成を可能とする。



資料 25 : 基礎となる修士課程との関係

表 1 修士課程と博士後期課程の養成人材像と教育課程の概要

	修士課程	博士後期課程
養成人材像	スポーツ科学、健康科学、スポーツ教育学等に関する学術的研究能力と専門的スキルを修得し、社会で指導的役割を担う人材。	氷雪寒冷圏域を中心とした生涯スポーツの推進に向けて、高度な学問的専門知識を修得し、科学的分析能力や学術的研究能力を備えた人材。
教育課程の概要	北海道はじめ氷雪寒冷圏域を中心的対象とする生涯スポーツ社会の発展に向けて、運動・スポーツや健康分野に関する学術的研究能力と専門的スキルを修得させる。スポーツを多面的、俯瞰的に捉えるため「スポーツ科学」「応用健康科学」「スポーツ教育学」という領域を設定する。	氷雪寒冷圏域の生涯スポーツ社会の深化・発展を果すため、スポーツ動作の理論化や冬季スポーツを主とする競技スポーツの研究手法を身に付ける「スポーツ科学」と、氷雪寒冷圏域特有の健康問題や運動を制限する要因をふまえ、生涯スポーツ活動を推進する「生涯スポーツ学」の領域を設定する。

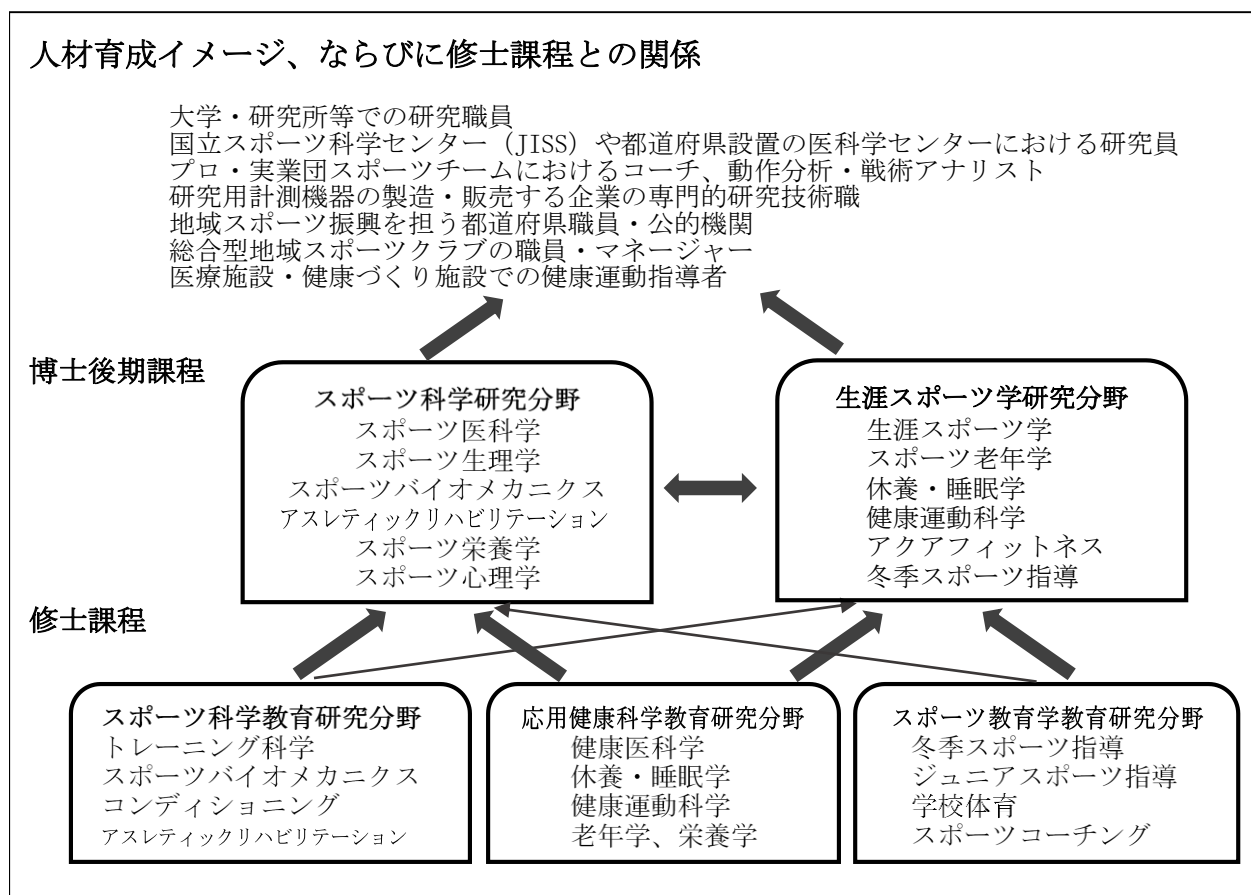


図 1 修士課程と博士後期課程との関係

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 28)

新	旧
<p>博士後期課程では、より高度な教育研究能力を有し、将来的に、大学や大学院、研究所等での教育研究の指導的な立場を担える人材の養成を想定している。そのため博士後期課程においては、既存の単一研究領域だけでなく、複眼的視野で全体像を把握できる専門性を先鋭化していく必要がある。このような視点から、修士課程において3分野で構成していた研究分野を、博士後期課程では「スポーツ科学研究分野」と「生涯スポーツ学研究分野」の2分野で構成した。この2分野は、修士課程からの学問的連続性と研究領域の統合により、高度な学際的なアプローチが可能となる分野構成とした。(資料25, 図1)。</p> <p>博士後期課程における「スポーツ科学研究分野」では、冬季スポーツにおける競技者育成やトップアスリートのサポートを主な研究対象とする。この研究分野には、修士課程の「スポーツ科学教育研究分野」のトレーニング科学、スポーツバイオメカニクス、アスレティックリハビリテーションなどに加えて、「応用健康科学教育研究分野」のスポーツ・運動に関する医学、生理学、栄養学、心理学の専門性を合わせることで、より複眼的な視野や研究能力を高度化・深化させることが可能となる。</p> <p>博士後期課程の「生涯スポーツ学研究分野」は、氷雪寒冷圏域の特殊性を鑑みた生涯スポーツの推進、健康づくりを主な研究対象とする。修士課程における「応用健康科学教育研究分野」の健康運動科学、老年学、休養・睡眠学と、「スポーツ教育学教育研究分野」の冬季スポーツ指導、ジュニアスポーツ指導、学校体育、コーチング学を</p>	<p>博士後期課程においては、共通科目と専門科目からなり、専門科目は、修士課程からの研究領域を高度化・深化を図り、「スポーツ科学研究分野」と「生涯スポーツ学研究分野」の2分野に再構成した。生涯スポーツ社会の発展に向けて高度な研究能力を有した人材を養成できる教育研究体制とした(資料24, 図1)。</p>

<p><u>「生涯スポーツ学」という大きな専門性のなかにまとめ、より複眼的な視野と研究能力を高度化・深化させることを可能とした。</u></p> <p><u>これにより、修士課程の各専門分野で研究活動と研究方法論の基礎を習得した大学院生が、博士後期課程ではその研究能力を高度化・深化させることが可能となり、ディプロマ・ポリシーに掲げた「高度な専門的知識を修得し、課題設定能力、科学的分析能力、情報発信能力を備え、研究成果が国内外で認められ、当該分野で指導的な役割を担える人材」の養成を可能とする。</u></p> <p>【資料 25：基礎となる修士課程との関係】</p>	<p>【資料 24：基礎となる修士課程との関係】</p>
---	------------------------------

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

2. <学生確保の見通しが不明確>

長期的かつ安定的な学生確保の見通しについて、以下の点を含めて、改めて明確に説明すること。

(1) 学生確保の見通しを説明する根拠の一つとして、本課程への進学に関するアンケート調査結果を挙げているが、当該アンケート調査において「進学可能性時期」に係る設問があるにも関わらず、一切分析に活用がされておらず、長期的かつ安定的な学生確保の見通しがあるとは判断できない。

(2) 既設の生涯スポーツ研究科修士課程及び生涯学習学研究科修士課程の修了者における本課程への進学需要が高いとの説明がなされているが、他大学への博士課程進学率が著しく低いことに鑑みると、どの程度期待できるか疑義がある。

(3) 本課程の基礎となる同修士課程の入学生の約半数が社会人であることを説明しているが、本課程への社会人の入学需要に関する具体的な根拠が示されていないため、社会人学生の確保の見通しが不明確である。

(4) 人材需要の動向について、客観的な根拠が示されておらず、本課程で養成する人材に対する社会的ニーズがあるか判断できず、定員設定の妥当性も不明確である。

(対応)

長期的かつ安定的な学生確保についての具体的な根拠が示されていないのご指摘に対し、①本学修士課程修了生を対象にした進学に関するアンケートについて「進学可能性時期の分析」、②社会人における入学需要に関するアンケート調査の実施と分析、③本課程で養成する人材に対する社会的ニーズに関するアンケート調査の実施と分析を新たに実施した。これらデータを根拠に、安定的な入学確保が可能であることを追記した。

(1) 本学修士課程の在学生ならびに修了生を対象とした本課程への進学に関するアンケート調査結果について、指摘のあった「進学可能性時期」についての分析を行った。その結果、2021年度の開設年度に「是非、進学したい」「進学を検討する」と回答した者が計10名、2022年度が2名、2023年度が1名、時期未定が7名という結果が得られた。多くの者が開設年度での博士後期課程進学を希望していたため、彼らに個別に連絡を取り、「開設年度に入学できなかった場合には翌年以降の受験を考えている」旨を確認した。また修士課程の在学生11名のうち7名(64%)から「是非、進学したい」「進学を検討する」という前向きな回答が得られ、うち2名が開設年度の進学を検討していたことから、修士課程から博士後期課程への連続性を持った進学を考えている層が一定数存在する。本学生涯スポーツ学研究科修士課程は安定的に定員を確保していることから、本学修士課程から博士後期課程への安定的な入学者確保は可能である。以上の分析結果をもとに、安定的な学生確保の見通しがあることを明記した。

(新旧対照表) 学生の確保の見通し等を記載した書類 (p. 2)

新	旧
<p>② 本学修了生を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート調査結果</p> <p>(略)</p> <p>また進学可能性の時期についての結果をみると、2021年度の開設年度に「是非、進学したい」「進学を検討する」と回答した者が計10名であり、できるだけ早急に博士後期課程へ進学したいとの考えも示された(資料3, 表2)。また開設年度に進学を希望した者に対して個別に連絡を取り、全員から開設年度に入学できなかった場合には翌年以降の受験を考えている旨を確認した。また長期的かつ将来的な学生確保という点では、修士課程在学学生において11名中7名(64%)と非常に高い割合で、「是非、進学したい」「進学を検討する」という前向きな回答が得られたことは特筆すべき結果である。特に在学学生の中に開設年度の進学を検討している者が2名いたことから、修士課程から博士後期課程への連続性を持った進学を考えている層が一定数存在することも明らかとなった。本学生涯スポーツ学研究科修士課程は安定的に定員を確保していることから、本学修士課程から博士後期課程への安定的な入学者確保は可能といえる。</p>	<p>② 博士後期課程進学に関するアンケート調査結果</p> <p>(略)</p> <p>また修士課程在学学生において11名中7名(64%)と非常に高い割合で前向きな回答が見られたことは特筆すべき結果である。本学生涯スポーツ学研究科修士課程は安定的に定員を確保しており、博士後期課程入学者の確保が修士課程修了者によって十分期待できる結果を得た。これからも生涯スポーツ学研究科修士課程において、博士後期課程進学を視野に入れた人材養成を行うことにより、博士後期課程への入学者の確保が十分可能となる。</p>

### 資料3：博士後期課程への進学希望アンケート調査結果

表2 受験年度別にみた進学希望者数

	ぜひ進学したい	進学を検討する	合計
2021年4月(2021年度)	3	7(2)	10
2022年4月(2022年度)	1	1	2
2023年4月(2023年度)	1(1)	0	1
進学時期未定	0	7(4)	7

( ) 内は生涯スポーツ学研究科修士課程在学学生の数

(2) ご指摘の通り、既設の生涯スポーツ研究科修士課程及び生涯学習学研究科修士課程の修了者における他大学への博士課程進学率は決して高くはない。この理由は、1) 北海道内における体育・スポーツ科学を専門とする博士後期課程の進学先が限られていること、2) 関東圏等を含め北海道外への進学は経済的負担が高く困難があること、3) 本学修了生の主な研究テーマが北方圏を拠点とする研究が多く、他地域では継続的な研究遂行が難しいこと等が挙げられる。

これらの理由を背景に、今回、本学において、東北地方以北初となるスポーツ科学を専門とする博士号を輩出できる大学院を設置することは、意義あることと捉えている。

なお前述のとおり、本学修士課程の在学生ならびに修了生を対象としたアンケート結果において、本学博士後期課程へ進学希望者が多くみられたことから、本学博士後期課程を設置することで進学者増が見込めると判断する。

(新旧対照表) 学生の確保の見通し等を記載した書類 (p. 1)

新	旧
<u>以下のデータ分析に基づき、定員充足の見込みがあると判断した。</u>	<u>また、北海道内における体育・スポーツ系の大学教員の学位取得状況を調査した結果、博士学位取得を目指す大学教員の入学も見込まれる。</u>
(略)	(略)
<u>上記に示したように、これまでの本学修士課程修了者における他大学への博士後期課程進学率は決して高くない。これは、北海道内における体育・スポーツ科学を専門とする博士後期課程の進学先が限られていること、関東圏等を含め北海道外への進学は経済的負担が高いことが挙げられる。また、本学修了生の主な研究テーマが北方圏を拠点とする研究が多く、他地域では継続的な研究遂行が難しいことも理由となる。現在まで博士後期課程進学者が少ないという事実は、今回、東北地方以北初となるスポーツ科学を専門とする博士号を輩出できる大学院を設置する意義であると捉えている。</u>	<u>このように、教育・スポーツ関連の職に就き、博士後期課程への進学の可能性がある者が存在し、本学の大学院修了者に限っても博士後期課程の需要は高いといえる。</u>

(3) 博士後期課程で社会人の入学需要に関する具体的な根拠が示されていないというご指摘を受け、社会人を対象とした博士後期課程入学需要に関するアンケート調査を実施した。依頼数 68 名に対して 55 名より回答を得られ (回答率 81%)、大学院生涯スポーツ学研究所博士後期課程が設置された場合、「是非、進学したい」が 10 名、「進学を検討する」が 14 名と、回答者 55 名のうち計 24 名 (44%) から博士後期課程進学に対して前向きな回答が得られた。また 18 名から、今後、「博士課程設置に関する情報を希望する」との回答があり、受験を積極的に検討していることが明らかになった。また「進学可能性の時期」については、2021 年度に 9 名、2022 年度に 2 名、2023 年度に 3 名となっていた。

以上の分析結果をもとに、本学修了生同様に、社会人においても安定的な学生確保の見通しがあることを確認した。

(新旧対照表) 学生の確保の見通し等を記載した書類 (p. 2~p. 3)

新	旧
<p>③ <u>社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート調査結果</u></p> <p><u>社会人の入学需要を確認するために、社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート調査を実施した(資料 4)。実施方法は前述の本学大学院修士課程修了者等を対象とした調査と同様に、本学教員によって進学対象者となるべき社会人へメールにてアンケート調査を行った。回答者が指定した返信アドレスに必要事項を記載する Web 調査方式であった。質問項目は、氏名、現在の所属(勤務先)、業種、役職・肩書、取得学位、博士後期課程が開設した場合の進学意向、進学可能性時期、博士後期課程進学にあたっての疑問、課題、要望など(自由記述)とした。調査は令和 2 年 8 月に実施し、依頼数 68 名に対し、55 名より回答を得た(回答率 81%)。調査結果を資料 5 に示す。なお今回の調査結果には、前述の本学大学院修士課程修了者等を対象とした調査の回答者は含まない。</u></p> <p><u>本調査の結果、大学院生涯スポーツ学研究所博士後期課程が設置された場合、「是非、進学したい」が 10 名、「進学を検討する」が 14 名と、回答者 55 名のうち計 24 名 (44%) から博士後期課程進学に対して前向きな回答が得られた(資料 5, 表</u></p>	

<p>1)。</p> <p><u>「是非、進学をしたい」あるいは「進学を検討する」と回答した者を合わせて「進学希望」とし、その割合を業種別に整理した結果、「大学・専門学校（21名中11名、52%）」「スポーツ協会・健康づくり財団（6名中3名、50%）」「スポーツ医・科学・トレーニングセンター（5名中3名、60%）」に勤務する者の進学希望が高かった（資料5、表2）。</u></p> <p><u>進学可能性の時期についての結果をみると、進学希望者は令和3年度に9名、令和4年度に2名、令和5年度に3名であった（資料5、表3）。また18名は、今後「博士課程設置に関する情報（募集要項など）を希望する」と回答しており、受験について積極的に検討していることがわかる（資料5、表4）。</u></p> <p><u>以上の結果から、本研究科博士後期課程への社会人の入学需要は十分にあると考えられ前述した修士修了生のアンケート結果と併せると、安定した学生確保は十分可能と判断できる。</u></p> <p><u>【資料4：社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート】</u></p> <p><u>【資料5：社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート調査結果】</u></p>	
---	--



#### 資料 4 : 社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート

##### 北翔大学 生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程への 入学意向調査

令和 3 年 4 月の開設を目指し、「北翔大学 生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程」の設置を申請予定です。添付の概要をご確認の上、以下の回答アドレスから、ご回答ください。

※設置計画は予定であり、内容が変更となる場合があります。  
得られた個人情報は本件にのみ活用し他目的による利用はいたしません。

回答アドレス

[https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=S9z\\_oZPKf0605JQLN2BAnFyHMwL3URhEkQX\\_9kz2v-hUM1ZaNFczUzdMMFY4QURKUTE20VJBUTZQTi4u](https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=S9z_oZPKf0605JQLN2BAnFyHMwL3URhEkQX_9kz2v-hUM1ZaNFczUzdMMFY4QURKUTE20VJBUTZQTi4u)

Q1 : 氏名 (任意) : 今後、博士課程に関する情報が必要な方は記載願います。

Q2 : 所属 (任意)

Q3 : 業種 (以下から選択してください)

回答 :

- ①大学・専門学校
- ②小・中学校, 高等学校, 特別支援学校
- ③行政機関 (都道府県・市町村)
- ④スポーツ協会・健康づくり財団
- ⑤スポーツ医・科学・トレーニングセンター (JISS, NTC などの国立, 都道府県立含む)
- ⑥プロスポーツ団体
- ⑦各競技団体・連盟
- ⑧スポーツクラブ (民間, 総合型, NPO など含む)
- ⑨スポーツ用具製造・販売
- ⑩医療・福祉系
- ⑪その他

Q4 : 役職・肩書 (自由記述)

Q5：取得学位

回答：

- ①学士（大学卒業）
- ②修士（修士課程修了）

Q6：北翔大学大学院生涯スポーツ学研究科に博士後期課程が設置された場合の進学希望についてお知らせください。

回答

- ①是非、進学したい
- ②進学を検討する
- ③進学する予定はない
- ④どちらとも言えない

Q7：上記で「進学希望」または「進学を検討する」と回答された方：進学可能性のある年度を教えてください。

回答：

- ①2021年4月（2021年度）
- ②2022年4月（2022年度）
- ③2023年4月（2023年度）
- ④2024年4月（2024年度）
- ⑤未定

Q8：今後、博士課程設置に関する情報（募集要項など）を希望しますか？

回答：

- ①希望する
- ②希望しない

Q9：博士課程進学にあたっての疑問、課題、要望など自由に記載ください。（自由記述）

## 生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程の概要(予定)

※設置認可申請中 設置計画は予定であり、内容が変更となる場合があります。

### 1. 研究科の名称と学位

研究科名称：生涯スポーツ学研究科：Graduate School of Lifelong Sport

専攻名称：生涯スポーツ学専攻博士後期課程：

Doctoral Program in Lifelong Sport Sciences

学位名称：博士（スポーツ科学）：Doctor of Philosophy in Sport Sciences

### 2. 開設予定年度：令和3年4月

### 3. 修業年限：標準修業年限は3年とし、最長6年間の在学を可能とする。

### 4. 授業料

表1 入学金・授業料等（単位：円）

	前学期	後学期	合計
入学金	200,000	—	200,000
授業料	260,000	260,000	520,000
施設設備費	50,000	50,000	100,000
計	510,000	310,000	820,000

※本学修士課程修了者は入学金免除

参考：国立大学授業料 817,800 円（入学金 282,000 円、授業料 535,800 円）

### 5. 養成人材像と教育方針

本研究科の養成人材像は、「北海道をはじめ氷雪寒冷圏域における豊かな生涯スポーツ社会の発展に向けて、スポーツ科学・生涯スポーツ学に関する高度な専門的知識を修得し、課題設定能力、科学的分析能力、情報発信能力を備えた研究者及び高度職業人」である。そのための教育方針は以下に示す通りである。

#### 【ディプロマ・ポリシー】

北海道をはじめ氷雪寒冷圏域における豊かな生涯スポーツ社会の発展に向けて、スポーツ科学・生涯スポーツ学に関する高度な専門的知識を修得し、課題設定能力、科学的分析能力、情報発信能力を備え、研究成果が国内外で認められた者、当該分野で指導的な役割を担える者に学位を授与する。

### 【カリキュラム・ポリシー】

院生の研究能力を専門的に深化できるよう、教育課程を共通科目、専門科目、及び研究指導科目の3領域で構成する。

共通科目では、国際的な研究能力を身につけるため、英文読解と作文能力及びプレゼンテーション能力を養う。専門科目はスポーツ科学研究分野と生涯スポーツ学研究分野の2分野で編成される。スポーツ科学研究分野では、運動生理学やバイオメカニクス、トレーニング科学などの研究手法を修得し、冬季スポーツ種目を中心とする競技スポーツの科学的分析・研究能力を養う。生涯スポーツ学研究分野では、応用健康科学、生涯スポーツ学、スポーツ教育学などの研究手法を用いて、地域住民の健康問題の解決、生涯スポーツの振興に貢献できる研究能力を養う。研究指導科目では、複眼的な指導・評価体制で実施し、修業年限内に博士論文を完成できるよう段階的に構成する。

### 【アドミッション・ポリシー】

運動やスポーツ、健康に関する学術研究や科学的知識及び専門的技能を有する人材を求める。スポーツを科学的に分析する能力を有する人材や、生涯スポーツ活動の推進や健康増進のための研究能力を有する人材を受け入れる。また、博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を有すること。なお、スポーツ競技者へのセカンドキャリア、コーチ・指導者へのリカレント教育、保健体育科教員の高度専門化の観点から、社会人の入学を積極的に受け入れる。

## 5. 入学選抜方法

### 1) 英語能力の判定

博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を、TOEIC または TOEFL のスコアから判定する。入学後に英語論文を精読することのできる能力を評価する。尚、TOEIC または TOEFL のスコアは、試験日の2年前までを有効とする。

### 2) 口述試験

出願者は、出願時に提出した研究計画書に基づきプレゼンテーションを行い、その内容について質疑応答を行う。研究目的や方法、調査対象及び期間等の妥当性や準備状況により研究遂行能力を評価する。また、スポーツ・健康に関する学術研究ならびに科学的知識や専門的技能を有しているかも評価する。

### 3) 合否判定

口述試験と英語能力を総合的に評価し合否判定を行う。

## 6. 教育課程の概要

表2 授業科目・形態、開講年次及び修得単位数（予定）

科目区分	科目名	授業形態	開講年次・学期、単位					
			1年次		2年次		3年次	
			前	後	前	後	前	後
共通科目	Sports Academic English	演習	②					
専門科目	スポーツ科学研究分野	スポーツ医科学特殊研究	講義	2				
		スポーツ生理学特殊研究	講義	2				
		スポーツバイオメカニクス特殊研究	講義	2				
		アスレティックリハビリテーション特殊研究	講義	2				
		スポーツ栄養学特殊研究	講義	2				
		スポーツ心理学特殊研究	講義	2				
	生涯スポーツ学研究分野	生涯スポーツ学特殊研究	講義	2				
		スポーツ老年学特殊研究	講義	2				
		休養・睡眠学特殊研究	講義	2				
		健康運動科学特殊研究	講義	2				
		アクアフィットネス特殊研究	講義	2				
研究指導	冬季スポーツ指導特殊研究	講義	2					
	特別研究指導Ⅰ	演習		④				
	特別研究指導Ⅱ	演習			④			
	特別研究指導Ⅲ	演習				④		

備考 表中の○数字の単位は必修科目の単位数を示す。

## 7. 修了要件

- 1) 必修4科目14単位と選択1科目2単位を含む合計16単位以上を修得すること(表9)。
- 2) 学位授与審査に合格し、博士論文が受理されること。
- 3) 博士論文の提出要件：
  - ①筆頭著者として査読付き論文の掲載が2編以上決定されていること
  - ②国際学術会議での研究発表を1回以上行っていること

## 8. 修了後の進路の見通し

大学・研究所等での研究職、国立スポーツ科学センター（JISS）や都道府県設置の医科学センターにおける研究員、プロ・実業団スポーツチームにおけるコーチ、動作分析・戦術アナリスト、研究用計測機器の製造・販売する企業の専門的研究技術職、地域スポーツ振興を担う都道府県職員・公的機関、総合型地域スポーツクラブの職員・マネージャー、医療施設・健康づくり施設での健康運動指導者等。

以上

資料5：社会人を対象とした博士後期課程進学に関するアンケート調査結果

表1 社会人における進学希望者の割合

	人数	割合
是非、進学したい	10	18%
進学を検討する	14	25%
どちらともいえない	9	16%
進学する予定はない	22	40%

表2 業種別にみた進学希望者数

	進学希望	どちらとも いえない	進学する 予定はない	合計
大学・専門学校	11	4	6	21
小・中学校，高等学校	2	3	4	9
医療・福祉系	2	1	6	9
スポーツ協会・健康づくり財団	3	0	3	6
スポーツ医・科学・トレーニングセンター (JISS, NTC などの国立, 都道府県立含む)	3	1	1	5
その他 (行政機関、民間企業等)	3	0	2	5
総回答数	24	9	22	55

進学希望：「是非、進学したい」＋「進学を検討する」

表3 受験年度別にみた進学希望者数

	進学希望
2021年4月 (2021年度)	9
2022年4月 (2022年度)	2
2023年4月 (2023年度)	3
進学時期未定	10

表4 博士課程設置に関する情報 (募集要項など) の希望

	人数	割合
希望する	18	33%
希望しない	30	55%
無回答	7	13%

(4) 人材需要の動向に関する客観的な根拠が示されておらず、本課程で養成する人材に対する社会的ニーズがあるか判断できないとのご指摘を受け、博士後期課程で養成する人材の社会的需要を把握するためのアンケート調査を実施した。調査対象は、進路先として想定される大学・専門学校等の高等教育機関、小・中学校・高等学校、行政機関（都道府県・市町村）、スポーツ協会・健康づくり財団、スポーツ医・科学・トレーニングセンター、プロスポーツ団体、各競技団体・連盟、スポーツクラブ（民間、総合型、NPO など）、スポーツ用具製造・販売、医療・福祉系の企業・団体等であった。

依頼数 121 名に対し、104 名の管理職及び職員より回答を得た（回答率 86%）。その結果、「高度なスポーツ科学の研究を推進する生涯スポーツ学研究科博士後期課程の研究分野は、これからの社会にとって必要な領域だと思いますか」という問いに対して、89 名（86%）の回答者が「必要だと思う」、13 名（12%）の回答者が「やや必要だと思う」と回答した。

「博士号を取得した有為な人材が輩出された場合、貴方の職場での採用についてどのようにお考えですか？」については、「是非とも採用したい」が 18 名（17%）、「採用枠があれば、積極的に考える」が 49 名（47%）と、計 67 名（64%）から採用に前向きな回答が得られた。

「スポーツ科学分野での博士号取得者の必要性」については、「スポーツ界の更なる発展のためには重要と考える」が 87 名（83%）、「私どもの職場において必要と思う」が 6 名（6%）と、計 93 名（89%）から必要との回答を得た。さらに個別の意見においても、本研究科博士後期課程の設置に期待する意見が多く出された。

以上、アンケート分析の結果をもとに、本研究科博士後期課程で養成する人材の社会的需要は十分にあることを確信し、その旨を明記した。

(新旧対照表) 学生の確保の見通し等を記載した書類 (p. 5～p. 6)

新	旧
<p>⑨ <u>博士後期課程で養成する人材需要について</u></p> <p><u>本研究科博士後期課程で養成する人材の社会的需要を把握するために、人材需要に関するアンケート調査を実施した(資料 11)。調査対象は大学・専門学校等の高等教育機関、小・中学校・高等学校、行政機関(都道府県・市町村)、スポーツ協会・健康づくり財団、スポーツ医・科学・トレーニングセンター、プロスポーツ団体、各競技団体・連盟、スポーツクラブ(民間、総合型、NPO など)、スポーツ用具製造・販売、医療・福祉系の企業・団体等である。</u></p> <p><u>調査は本学の教員とキャリア支援センターを通じてメールにてアンケート依頼を行い、回答者が指定した返信アドレスに必要</u></p>	

<p>事項を記載する Web 調査方式で実施した。 質問項目は、氏名、現在の所属（勤務先）、業種、役職・肩書、「生涯スポーツ学研究科博士後期課程の研究分野の必要性について」、「博士号を取得した人材の採用について」、「スポーツ科学分野での博士号取得者の必要性について」とした。調査は令和 2 年 8 月に実施し、依頼数 121 名に対し、104 名の管理職及び職員より回答を得た（回答率 86%）。調査結果を資料 12 に示す。</p> <p>「高度なスポーツ科学の研究を推進する生涯スポーツ学研究科博士後期課程の研究分野は、これからの社会にとって必要な領域だと思いますか？」という問いに対して、89 名（86%）の回答者が「必要だと思う」、13 名（12%）の回答者が「やや必要だと思う」と回答した。</p> <p>「博士号を取得した有為な人材が輩出された場合、貴方の職場での採用についてどのようにお考えですか？」については、「是非とも採用したい」が 18 名（17%）、「採用枠があれば、積極的に考える」が 49 名（47%）と、計 67 名（64%）から採用に前向きな回答が得られた。</p> <p>「スポーツ科学分野での博士号取得者の必要性」については、「スポーツ界の更なる発展のためには重要と考える」が 87 名（83%）、「私どもの職場において必要と思う」が 6 名（6%）と、計 93 名（89%）から必要との回答を得た。</p> <p>さらに個別の意見においても、本研究科博士後期課程の設置に期待する意見が多く出された。競技力向上の観点では「パラリンピック冬季スポーツを推進する上で高度な専門知識を持つ指導者が不足しているため、大学院博士後期課程を開設することに大いに期待している（競技連盟、日本代表チーム General Manager）」、「メジャースポーツ以外でのスポーツ科学分野におけるエビデンス確立に寄与することができると考</p>	
--	--



えている。日本のウインタースポーツの科学分野を牽引する研修施設を望む（医療系部長）、「特定の冬季種目に特化した科学的な根拠に基づいたメソッドの構築に期待する（競技連盟理事）」、「競技力強化を目的に考えた場合、信頼出来る知識、経験値、リーダーシップが求められるため、本学の取り組みに期待する（競技連盟強化委員長）」など、冬季スポーツ強化のための研究拠点形成、人材輩出へ期待する意見を得た。

生涯スポーツ社会の実現や健康維持増進の観点においても「北海道という積雪寒冷地の特徴を生かした体育・スポーツに関する研究を推進する研究者の輩出も期待する（大学教員）」、「北海道における寿命 100 歳時代の新生児から高齢者を対象とした身体活動やスポーツ活動に関する研究者の必要性を痛感している（スポーツ協会評議員）」、「アダプテッドスポーツ、災害被災地域の健康づくり運動、健康福祉や公衆衛生活動の分野でも、意欲的な発言と行動実践ができる人材の育成を期待する（大学教員）」、「健康寿命を延ばすため、健康保険料削減のためにも期待している（広告会社代表取締役）」といった意見が出され、本研究科博士後期課程に対する期待度は高いといえる。

以上の結果から、本研究科博士後期課程で養成する人材の社会的需要は十分にあると判断できる。

【資料 11：博士後期課程で養成する人材の社会的需要に関するアンケート】

【資料 12：博士後期課程で養成する人材の社会的需要に関するアンケート調査結果】

## 資料 11：博士後期課程で養成する人材の社会的需要に関するアンケート

### 北翔大学 生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程に関するアンケート（企業・団体向け）

令和3年4月の開設を目指し、「北翔大学 生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程」を設置予定です。※設置認可申請中 設置計画は予定であり、内容が変更となる場合があります。

添付の概要をご確認の上、ご意見をお聞かせください。

#### 回答アドレス

[https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=S9z\\_oZPKf0605JQLN2BAnHTEyBwZ61BPnpg\\_hkX-NJhUQjdaWkFHQTNYNOZXU00wSE40Uk1XUDRHVC4u](https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=S9z_oZPKf0605JQLN2BAnHTEyBwZ61BPnpg_hkX-NJhUQjdaWkFHQTNYNOZXU00wSE40Uk1XUDRHVC4u)

Q1：ご氏名（任意）

Q2：ご所属名（任意）

Q3：業種（以下から選択してください）

回答：

- ①大学・専門学校
- ②小・中学校，高等学校
- ③行政機関（都道府県・市町村）
- ④スポーツ協会・健康づくり財団
- ⑤スポーツ医・科学・トレーニングセンター（JISS，NTCなどの国立，都道府県立含む）
- ⑥プロスポーツ団体
- ⑦各競技団体・連盟
- ⑧スポーツクラブ（民間，総合型，NPOなど含む）
- ⑨スポーツ用具製造・販売
- ⑩医療・福祉系
- ⑪その他

Q4：役職・肩書（自由記述）

Q5：高度なスポーツ科学の研究を推進する「生涯スポーツ学研究科博士後期課程」の研究分野は、これからの社会にとって必要な領域だと思いますか？

回答：

- ①必要だと思う
- ②やや必要だと思う
- ③あまり必要ではない
- ④必要ではない

Q6：博士号を取得した有為な人材が輩出された場合、貴方の職場での採用についてはどのようにお考えですか？

- ①是非とも採用したい
- ②採用枠があれば、積極的に考える
- ③現時点では、どちらとも言えない
- ④採用は難しいと思う

Q7：スポーツ科学分野での博士号取得者の必要性について、お考えをお聞かせください。

回答：

- ①スポーツ界の更なる発展のためには重要と考える
- ②私どもの職場において必要と思う
- ③どちらとも言えない
- ④現時点では、あまり必要性があるとは思わない

Q8.：その他のご質問があればご記入下さい（自由記述）。

資料 12：博士後期課程で養成する人材の社会的需要に関するアンケート調査結果

表 1 回答者の業種について

業種	回答数	%
大学・専門学校	20	19
小・中学校，高等学校	3	3
行政機関（都道府県・市町村）	7	7
スポーツ協会・健康づくり財団	9	9
スポーツ医・科学・トレーニングセンター （JISS, NTC などの国立，都道府県立含む）	5	5
プロスポーツ団体	9	9
各競技団体・連盟	10	9
スポーツクラブ（民間，総合型，NPO など含む）	14	13
スポーツ用具製造・販売	11	10
医療・福祉系	7	7
その他	9	9
計	104	100

表 2 高度なスポーツ科学の研究を推進する「生涯スポーツ学研究科博士後期課程」の研究分野は、これからの社会にとって必要な領域だと思いますか？

	回答数	%
必要だと思う	89	86
やや必要だと思う	13	12
あまり必要ではない	0	0
必要ではない	0	0
その他	2	2
計	104	100

表3 博士号を取得した有為な人材が輩出された場合、貴方の職場での採用についてはどのようにお考えですか？

	回答数	%
是非とも採用したい	18	17
採用枠があれば、積極的に考える	49	47
現時点では、どちらとも言えない	24	23
採用は難しいと思う	6	6
その他	7	7
計	104	100

表4 スポーツ科学分野での博士号取得者の必要性について、お考えをお聞かせください。

	回答数	%
スポーツ界の更なる発展のためには重要と考える	87	83
私どもの職場において必要と思う	6	6
どちらとも言えない	7	7
現時点では、あまり必要性があるとは思わない	1	1
その他	3	3
計	104	100

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

### 3. <教育課程が不明確>

教育課程について、審査意見1の対応を踏まえ、以下の点を明確に説明すること。

(1)「スポーツ科学研究分野」及び「生涯スポーツ学研究分野」を本課程での教育研究上の特色に掲げているが、本課程の修了要件を見ると、両分野から1科目2単位を選択するのみとなっており、このような教育課程でディプロマ・ポリシーを達成し、養成する人材像にかなう人材を養成できるのか疑義がある。このため、養成する人材像、ディプロマ・ポリシーに照らして、教育課程の適正性を明確に説明すること。

(2)「スポーツ科学研究分野」及び「生涯スポーツ学研究分野」の各科目について、いずれも科目名に「特殊研究」と掲げているが、具体的に何が「特殊」なのか不明確であるため、明確に説明すること。また、各科目における「研究」に関する講義内容のレベルにばらつきが見受けられ、一貫性のある教育が実施されるのか疑義があることから、各科目の講義内容の適正性について明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(3)シラバスの「成績評価の方法」について、例えば、「スポーツ生理学特殊研究」における「実技試験」や、「スポーツバイオメカニクス特殊研究」における「作品評価」など、具体的な内容が不明確なため、当該科目の評価方法としての適正性が判断できない。また、「その他」の具体的な評価内容も不明確である。このため、評価方法の具体的な内容を明らかにした上で、各科目の評価方法としての適正性について、明確に説明すること。

(4)「健康運動科学特殊研究」のシラバスの「その他」に記載されている「被験講義」がどのようなものか不明確なため、明確に説明すること。

(対応)

(1)教育課程の適正性を明確にする中で、「専門科目」について「両分野から1科目2単位の選択」で、「ディプロマ・ポリシーを達成し、養成する人材像にかなう人材を養成できるのか」が課題として挙げられた。

本教育課程における「専門科目」は、ディプロマ・ポリシーに掲げた「高度な専門的知識を修得し、課題設定能力、科学的分析能力、情報発信能力を備え、研究成果が国内外で認められ、当該分野で指導的な役割を担える人材」の養成に向けて、高度な専門知識と研究手法の修得を進める科目として位置づけた。個々の「特殊研究」科目は、各学問分野の発展に資する高い研究リテラシー教育を共通して実施するものである。したがって、1科目2単位の各専門科目の履修によって、高度な研究に必要な専門的知識と研究手法を修得することが可能である。

一方、生涯スポーツ社会の発展に向けた人材を養成する視点からは、学際的な視点が必要である。これには、履修指導の中で専門外の科目を受講することを促し、積極的な学术交流の機会をつくることで対応する。

尚、教育課程全体の適正性が明確になるよう、本修正を中心に「研究指導」、「共通科目」の記述も加筆修正した。

(2)「専門科目」の各科目名にある「特殊研究」において何が「特殊」であるかを明確にすること、併せて各「特殊研究」科目に「講義内容のレベルのばらつき」が見られることに対し、「各科目の講義内容の適正性」を明確に説明することとの指摘があった。

「特殊研究」は、修士課程の同分野の科目内容から、より一層、スポーツ科学における世界的に最先端で学際的な研究の発展的・専門的な高度な研究内容を扱うことから「特殊研究」の名称を用いた。全ての特殊研究科目では、修士課程における専門的学識教育のレベルを超えた高い研究リテラシー教育も共通して実施する。なお、特殊研究科目は、各分野の専門性の中で国際的研究動向を考究し、研究手法の習熟を進めることにより、高度な研究遂行に必要な課題設定能力・科学的分析能力の養成を実現することを記載した。

各講義内容のばらつきに対しては、「設置の趣旨等を記載した書類」に記載の各科目の内容について、それぞれ博士後期課程に相応しい科目として高度かつ学際的で、国際的な研究に即した内容とし、「特殊研究」を意味する説明に修正した。

「アスレティックリハビリテーション特殊研究」、「スポーツ栄養学特殊研究」及び「アクアフィットネス特殊研究」については、上記の修正に伴い、講義内容に齟齬が生じないように「授業科目の概要」、「シラバス（授業計画）」、「担当予定授業科目」についても併せて修正を行った。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 13～p. 14)

新	旧
<p>各分野で展開される科目区分及び科目名、授業の形態、開講年次を資料 15 に示す。本研究科では、<u>ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を有する人材養成のために、各専門分野における高度な専門知識と研究手法の修得を進め、独創的な研究課題による研究遂行と国際的な成果発信力を養成する体系的な教育課程を編成した。</u></p> <p><u>高度な専門知識や研究手法の修得に向けては、専門科目として各分野の「特殊研究」科目を配置する。本科目では、修士課程の同分野の科目内容から、より一層、スポーツ科学における世界的に最先端で学際的な研究の発展的・専門的な高度な研究内容を扱うことから「特殊研究」の名称を用いた。全ての特殊研究科目では、修士課程における専門的学識教育のレベルを超えた、高い研究リテラシー教育を共通して実施する。なお、特殊研究科目は、各分野の専門性の中で国際的研究動向を考究し、研究手法の習熟を進めることにより、高度な研究遂行</u></p>	<p>各分野で展開される科目区分及び科目名、授業の形態、開講年次を資料 15 に示す。本研究科では、<u>専門科目にある各分野の特殊研究科目で専門知識や技術を修得し、特別研究指導Ⅰ～Ⅲ（博士論文指導）において、研究テーマを専門的に追究できる教育課程編成とした。いずれの授業においても、個々の院生に応じた、きめ細やかな指導を実現する教育課程編成である。また、「Sports Academic English」を分野共通の必修科目として配置し、研究者としての英語論文執筆能力及びプレゼンテーション能力を養う。</u></p>

<p><u>に必要な課題設定能力・科学的分析能力の養成を実現する。なお、併せて、専門以外の科目も受講するよう履修指導し、積極的な学際的研究の交流を促す。</u></p> <p><u>高い研究遂行能力の育成のためには、研究指導科目として「特別研究指導Ⅰ～Ⅲ」を配置し、これを本教育課程の中核に位置づける。特別研究指導は、分野を横断してⅠからⅢへ連続性を持たせ、段階的に学位論文作成に向けて学際的な研究指導を行う。専門分野は多岐に広がりながらも、高度な研究を進めるプロセスは共有し、指導教員及び他分野を含めた副指導教員により一貫した研究指導を進める。</u></p> <p><u>また、国際的な成果発信に必須となる英語能力の育成は、分野共通の必修科目として「Sports Academic English」を配置する。スポーツ科学の研究者として必要な、学術コミュニケーションのための英語能力を養う。</u></p> <p><u>以上のように「特殊研究」、「研究指導」、「共通科目」が有機的に関連した教育課程とし、ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を有する人材養成を実現する。</u></p>	
--	--



(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 14~p. 16)

新	旧
<p>2) 専門科目：スポーツ科学研究分野</p> <p>(略)</p> <p>「スポーツ医科学特殊研究」では、冬季スポーツ選手の医学的サポート、先進的なコンディショニングや氷雪寒冷圏域特有の健康問題とその対処法を、<u>最新の知見に触れながら医学的な側面から考究する。</u>ここでは生活習慣病の予防・改善など、有リスク・ハイリスク者を対象とした運動処方を中心とした様々な介入手法による研究を推進する力を養う。</p> <p>「スポーツ生理学特殊研究」では、<u>人間が発する生理学的情報の収集方法を修得し、分析・評価する能力を培う。</u>酸素運搬系・エネルギー代謝系、加齢や生活習慣病と運動など基盤的な運動生理学系の<u>高度で専門的な知識を踏まえ、スポーツ応用の観点から考究する。</u>特に、<u>氷雪寒冷圏域の住民の体力と関連する健康問題や、氷雪寒冷圏域に拠点を置くアスリートとパフォーマンスにかかわる諸問題を見出し、最新の科学的知見を把握し、生理学的側面からその問題に取り組む研究能力を獲得する。</u></p> <p>「スポーツバイオメカニクス特殊研究」では、<u>国際的研究動向をレビューし、スポーツ動作の計測方法や定量的分析・評価方法を修得する。</u>体力・パフォーマンス向上や運動の巧緻性、調整能力及び運動学習に関する<u>高度な知識を得る。</u>計測方法では<u>必要な工学的な知識と最新の計測機器や計測技術を修得する。</u>分析では<u>数学や運動力学、流体力学及び解剖学等の専門知識をベース</u></p>	<p>2) 専門科目：スポーツ科学研究分野</p> <p>(略)</p> <p>「スポーツ医科学特殊研究」では、冬季スポーツ選手の医学的サポート、先進的なコンディショニングや氷雪寒冷圏域特有の健康問題とその対処法を医学的な側面から<u>講ずる。</u>ここでは生活習慣病の予防・改善など、有リスク・ハイリスク者を対象とした運動処方が中心となる。</p> <p>「スポーツ生理学特殊研究」では、<u>医科学サポートのために、人間の機能・運動面(生理学)と形態・構造面(解剖学)を修得させる。</u>酸素運搬系・エネルギー代謝系、<u>健康運動と血液生化学、加齢や生活習慣病と運動、メタボリックシンドロームと運動など基盤的な運動生理学系の知識を踏まえながら、スポーツ応用の観点から講ずる。</u></p> <p>「スポーツバイオメカニクス特殊研究」では、<u>身体構造を理解し、スポーツ動作の定量的分析・評価方法を修得する。</u>体力・パフォーマンス向上や運動の巧緻性、調整能力及び運動学習に関する知識を<u>修得する。</u>これによって身体運動を客観的に分析・評価する能力を養い、最適動作や運動の安全性、効率性を数値データから議論する能力を高める。<u>これらの知識は優れたバランス能力</u></p>

<p>に論理的な思考プロセスを身に付ける。これによって身体運動を客観的に分析・評価する能力を養い、最適動作や運動の安全性、効率性を数値データから議論する能力を高める。</p> <p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」では、<u>スポーツ外傷・障害からの安全かつ効率的な競技復帰を科学的に検証・実践する。スポーツ外傷・障害の機能評価及びプログラムに関する最新の学術的知見をレビューし、国際的研究動向を探求する。また、先行研究の問題点・課題を明確にする過程で高度な課題設定能力を養い、スポーツ医学の視点から解決する最新の研究手法・科学的分析能力を獲得する。</u></p> <p>「スポーツ栄養学特殊研究」では、身体活動の増加に伴い生じる生化学的・生理的応答に対して栄養学の観点から<u>最新のエビデンスに基づき、スポーツ栄養学の知見を深めると同時に、国内外におけるスポーツ栄養学分野の研究動向を理解する。スポーツ栄養学分野における新規性及び独自性が高い研究活動を探求し、人々の健康増進及びパフォーマンス向上の貢献に寄与する活動を遂行できる能力を修得する。また、パフォーマンス向上に欠かせない栄養サポート技術を実践的に考究する。</u></p> <p>「スポーツ心理学特殊研究」では、<u>国際的な学術研究成果に基づき、運動制御や運動学習の中枢系の働きを理解し、スポーツ場面での脳における情報処理過程、身体の認知などについて高度な課題設定能力・科学的分析方法を考究する。さらに競技者への心理的サポートについて理論及び実践を通して修得する。実践場面での心理的問題を解決するための最新のメンタルトレーニ</u></p>	<p><u>が要求される氷上、雪上スポーツの運動学習を理論化する上で不可欠である。</u></p> <p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」では、<u>科学的エビデンスに基づいて、個々人の身体特性や環境に合わせたコンディショニング法や予防的リハビリテーション法を理論的かつ実践的に修得する。スポーツ外傷・障害を想定して、医科学的情報の収集や機能評価、問題点抽出の方法について講じ、アスレティックリハビリテーションの目標設定とプログラミングを立案できる能力を獲得させる。</u></p> <p>「スポーツ栄養学特殊研究」では、<u>コンディショニングの調整のために不可欠な栄養サポートについての知識及び実践方法を理論的かつ実践的に修得する。身体活動の増加に伴い生じる生化学的・生理的応答に対して栄養学の観点からエビデンスを提示し、栄養素や栄養成分の必要量、期分けによる食事内容及び摂取タイミング、水分補給の重要性を講ずる。</u></p> <p>「スポーツ心理学特殊研究」では、<u>運動制御や運動学習など中枢系の働き、また心理的な側面からのサポートについて理論及び実践を通じて修得する。スポーツ場面での脳からの運動指令や状況判断に関わる情報処理過程、身体の認知などの知識、そして実践場面での心理的問題を解決するためのメンタルトレーニングやチームビルディングの手法について講ずる。</u></p>
--	--

<p><u>ングやチームビルディングの手法、パフォーマンス発揮に不可欠となる心理側面のサポートに向けて、検査・評価能力及び高い研究リテラシー能力を養う。</u></p> <p>3) 専門科目：生涯スポーツ学研究分野</p> <p>(略)</p> <p>「生涯スポーツ学特殊研究」では、生涯スポーツの諸現象に関して学際的研究成果の<u>動向と課題を明らかにするとともに、諸外国のスポーツ政策、実践プログラムの評価を行い、国際的比較研究から蓄積された生涯スポーツ学研究の社会的効果を検証できる研究能力を養う。</u>また、<u>北海道の地域的特性である氷雪寒冷圏域における生涯スポーツ振興の基礎的・応用的理論と、その現状や課題解決に必要な高度かつ専門的な研究方法を考究する。</u></p> <p>「スポーツ老年学特殊研究」では、生涯の最終段階となる高齢期における、<u>スポーツの果たす役割や実践の方向性を探求すべく、最新の研究動向を踏まえて議論する。</u>高齢社会の諸課題や心身機能の加齢変化については、<u>学際的な視点や質的・量的な研究手法の理解が必要なため、その修得を進める。スポーツの実践、氷雪寒冷圏域の文化を軸とした老年学的課題の理解と対策にむけて学識を高める。</u></p> <p>「休養・睡眠学特殊研究」では、近年、著しい発展や広がりを見せている睡眠学の見地から、<u>スポーツ・運動との関係性をみた睡眠研究の国際的な動向をふまえ、学際的に睡眠を捉える視点を養う。</u>さらに睡眠データの収集方法や解析方法など、この分野</p>	<p>3) 専門科目：生涯スポーツ学研究分野</p> <p>(略)</p> <p>「生涯スポーツ学特殊研究」では、生涯スポーツの諸現象に関して学際的研究の<u>見地から考究するとともに、諸外国の政策、実践プログラム、研究動向を国際的比較研究から講ずる。特に、地域的特性である氷雪寒冷圏域における生涯スポーツの基礎的理論と、その現状や課題について理解を深める。</u></p> <p>「スポーツ老年学特殊研究」では、生涯の最終段階となる高齢期における、<u>スポーツの果たす役割や実践の方向性を探求する。高齢社会の諸課題や心身機能の加齢変化について、学際的な視点の養成や研究手法の理解を進め、スポーツを軸とした健康課題への対策にむけた研究遂行能力を高める。</u></p> <p>「休養・睡眠学特殊研究」では、近年、著しい発展や広がりを見せている睡眠学の見地から、<u>特にスポーツ・運動との関係性をみた睡眠研究の成果を検討しながら、多角的に睡眠を捉える視点を養う。</u>さらに睡眠データの収集方法や解析方法など、この分野</p>
--	---

で研究を進めるための高度な手法を身につけ、研究遂行能力を高める。

「健康運動科学特殊研究」では、最新の健康・医学関連における国際的研究動向を踏まえた諸問題とこれらに対する最先端なアプローチ法・対処法について探求する。最新の知見に触れながら健康医科学の高度な知識を身につけるとともに、医科学の立場からアプローチする。さらに氷雪寒冷圏域での普及・推進が期待される種目として、積雪を活用した運動に関する発展的・専門的知識も取り入れて議論を行う。

「アクアフィットネス特殊研究」では、国際的研究動向を分析・把握した上で、応用健康科学的見地から、水の特性に基づいた氷雪寒冷圏域における健康運動の果たす役割について探求し、運動処方としてのあり方や新たな可能性について模索・考案できる研究能力を修得する。最新のアクアフィットネス指導技術やその効果の測定・評価技術を修得し、高度な研究遂行に必要な課題設定能力と科学的分析能力を養成する。

「冬季スポーツ指導特殊研究」では、積雪寒冷圏域における冬季スポーツの普及・発展を目指し、国内外の最新の研究動向を把握し、競技者、一般愛好家など、対象者に応じた高度な技術分析・指導方法を修得する。特に、スキー、スノーボードなどの雪上スポーツを中心的対象として研究を進めるとともに、他の生涯スポーツ種目の指導方法への応用性についても考究する。

野で研究を進めるための手法を身につける。

「健康運動科学特殊研究」では、最新の健康・医学関連の諸問題とこれらに対するアプローチ法・対処法について講ずる。近年、健康・スポーツ医科学研究が発展し、その考え方は大きく変化してきている。常に最新の知見に触れながら健康医科学の基礎知識を身につけるとともに、医科学の立場からアプローチする。さらに氷雪寒冷圏域での普及・推進が期待される種目として、積雪を活用した運動、あるいは屋内で水を媒体とした運動に関する専門性も取り入れている。

「アクアフィットネス特殊研究」では、応用健康科学的見地から、水の特性を理解し、中高年を対象とした氷雪寒冷圏域における水を活用した健康運動や生涯スポーツについて、その現状や課題について理解を深め、その活用法について考察をする。

「冬季スポーツ指導特殊研究」では、積雪寒冷圏域における冬季スポーツの指導方法についての認識を深める。特に、スキー、スノーボードなどの雪上スポーツを中心とする。競技者、一般愛好家への効果的な指導方法や技術分析方法について取り扱う。それらの方法論を学ぶことにより、他の生涯スポーツ種目の指導方法の探求にも応用する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 19)

新	旧
博士論文指導を行う科目「特別研究指導Ⅰ～Ⅲ」では、1名の院生に対して、研究指導教員(◎教員)1名と <u>他分野を含めた副指導教員(合教員以上)1名以上の複数教員が担当し、組織的に研究指導及び論文執筆指導を行う。</u>	博士論文指導を行う科目「特別研究指導Ⅰ～Ⅲ」では、1名の院生に対して、研究指導教員(◎教員)1名と副指導教員(合教員以上)1名以上の複数教員が担当し、組織的に研究指導及び論文執筆指導を行う。

(新旧対照表) 授業科目の概要 (p. 1～p. 2)

新	旧
「アスレティックリハビリテーション特殊研究」 <u>スポーツ外傷・障害からの安全かつ効率的な競技復帰を科学的に検証・実践する。スポーツ外傷・障害の機能評価及びプログラムに関する最新の学術的知見をレビューし、国際的研究動向を探求する。また、先行研究の問題点・課題を明確にする過程で高度な課題設定能力を養い、スポーツ医科学の視点から解決する最新の研究手法・科学的分析能力を獲得する。</u>	「アスレティックリハビリテーション特殊研究」 <u>アスレティックリハビリテーションの対象となるスポーツ外傷・障害に関する機能評価およびプログラムについてディスカッションする。最新の学術的知見を基に、アスレティックリハビリテーションの現状の課題を明確にし、これらをスポーツ医科学の視点から解決する研究手法について検討・実践する。</u>
「スポーツ栄養学特殊研究」 <u>近年、スポーツ栄養学分野の研究は、現象論にとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。本講義は、身体活動の増加に伴い生じる生化学的・生理的応答に対して栄養学の観点から最新のエビデンスに基づき、スポーツ栄養学の知見を深めると同時に、国内外におけるスポーツ栄養学分野の研究動向を理解する。スポーツ栄養学分野における新規性及び独自性が高い研究活動を探求し、人々の健康増進及びパフォーマンス向上の貢献に寄与する活動を遂行できる能力を修得する。また、パフォーマンス向上に欠かせない栄養サポート技術を実践的に考究する。</u>	「スポーツ栄養学特殊研究」 <u>近年、スポーツ栄養学分野の研究は現象論までにとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。本講座はスポーツ科学と栄養学の両方を組み合わせ、スポーツ競技を現象論からメカニズムまで網羅するべく先行研究を熟読する。そこから得られた知見を整理し、新たな問題点と向き合い研究・考察していく。そこで得られた結果について多角的に討論していく。</u>

<p>「アクアフィットネス特殊研究」</p> <p>本講義では、<u>国際的研究動向を分析・把握した上で、応用健康科学的見地から、水の特性に基づいた氷雪寒冷圏域における健康運動の果たす役割について探求し、運動処方としてのあり方や新たな可能性について模索・考案できる研究能力を修得する。最新のアクアフィットネス指導技術やその効果の測定・評価技術を修得し、高度な研究遂行に必要な課題設定能力と科学的分析能力を養成する。</u></p>	<p>「アクアフィットネス特殊研究」</p> <p><u>アクアフィットネスとは、泳ぐことのみならず、水中運動や水療法を含み、水を媒体として健康を維持増進させることを幅広く捉えた概念である。本講義では、応用健康科学的見地から、水の特性を理解し、中高年を対象とした氷雪寒冷圏域における水を活用した健康運動や生涯スポーツについて、その現状や課題について理解を深め、その活用法について考察をする。</u></p>
---	---

(新旧対照表) シラバス (授業計画) 「授業の目的 (ねらい)」 (p. 5~p. 6、p. 12)

新	旧
<p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」</p> <p><u>スポーツ外傷・障害からの安全かつ効率的な競技復帰を科学的に検証・実践する。スポーツ外傷・障害の機能評価及びプログラムに関する最新の学術的知見をレビューし、国際的研究動向を探求する。また、先行研究の問題点・課題を明確にする過程で高度な課題設定能力を養い、スポーツ医科学の視点から解決する最新の研究手法・科学的分析能力を獲得する。</u></p>	<p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」</p> <p><u>スポーツ医科学に関する研究的視点から、スポーツ現場におけるスポーツ外傷・障害予防、安全かつ効率的な競技復帰を科学的に検証・実践する。講義では、アスレティックリハビリテーションの対象となるスポーツ外傷・障害に関する機能評価およびプログラムについて最新の学術的知見をレビューする。先行研究の知見を基に、アスレティックリハビリテーションにおける現状の問題点・課題を明確にし、これらをスポーツ医科学の視点から解決する研究手法について議論する。また、演習形式で実験も行い、最新の研究手法を用いてデータを収集する実践力を培う。</u></p>
<p>「スポーツ栄養学特殊研究」</p> <p><u>近年、スポーツ栄養学分野の研究は、現象論にとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。本講義は、身体活動の増加に伴い生じる生化学的・生理的応答に対して栄養学の観点から最新のエ</u></p>	<p>「スポーツ栄養学特殊研究」</p> <p><u>近年、スポーツ栄養学分野の研究は現象論までにとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。本講座はスポーツ科学と栄養学の両方を組み合わせ、競技スポーツを現象論からメカニズムまで</u></p>

<p>ビデンスに基づき、スポーツ栄養学の知見を深めると同時に、国内外におけるスポーツ栄養学分野の研究動向を理解する。スポーツ栄養学分野における新規性及び独自性が高い研究活動を探求し、人々の健康増進及びパフォーマンス向上の貢献に寄与する活動を遂行できる能力を修得する。また、パフォーマンス向上に欠かせない栄養サポート技術を実践的に考究する。</p>	<p>網羅するべく先行研究を熟読する。そこから得られた知見を整理し、新たな問題点と向き合い研究・考察していく。そこで得られた結果について多角的に討論していく。</p>
<p>「アクアフィットネス特殊研究」 本講義では、国際的研究動向を分析・把握した上で、<u>応用健康科学的見地から、水の特性に基づいた氷雪寒冷圏域における健康運動の果たす役割について探求し、運動処方としてのあり方や新たな可能性について模索・考案できる研究能力を修得する。最新のアクアフィットネス指導技術やその効果の測定・評価技術を修得し、高度な研究遂行に必要な課題設定能力と科学的分析能力を養成する。</u></p>	<p>「アクアフィットネス特殊研究」 アクアフィットネスとは、泳ぐことのみならず、<u>水中運動や水療法を含み、水を媒体として健康を維持増進させることを幅広く捉えた概念である。本講義のねらいは、応用健康科学的見地から、水の特性を理解し、中高年を対象とした氷雪寒冷圏域における水を活用した健康運動や生涯スポーツについて、その現状や課題について理解を深める。</u></p>

(新旧対照表) 担当予定授業科目 (調書番号①～③)

新	旧
<p>「アクアフィットネス特殊研究」 本講義では、国際的研究動向を分析・把握した上で、<u>応用健康科学的見地から、水の特性に基づいた氷雪寒冷圏域における健康運動の果たす役割について探求し、運動処方としてのあり方や新たな可能性について模索・考案できる研究能力を修得する。最新のアクアフィットネス指導技術やその効果の測定・評価技術を修得し、高度な研究遂行に必要な課題設定能力と科学的分析能力を養成する。</u></p>	<p>「アクアフィットネス特殊研究」 アクアフィットネスとは、泳ぐことのみならず、<u>水中運動や水療法を含み、水を媒体として健康を維持増進させることを幅広く捉えた概念である。本講義では、応用健康科学的見地から、水の特性を理解し、中高年を対象とした氷雪寒冷圏域における水を活用した健康運動や生涯スポーツについて、その現状や課題について理解を深め、その活用法について考察をする。</u></p>
<p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」</p>	<p>「アスレティックリハビリテーション特殊研究」</p>

<p><u>スポーツ外傷・障害からの安全かつ効率的な競技復帰を科学的に検証・実践する。</u>  <u>スポーツ外傷・障害の機能評価及びプログラムに関する最新の学術的知見をレビューし、国際的研究動向を探求する。また、先行研究の問題点・課題を明確にする過程で高度な課題設定能力を養い、スポーツ医科学の視点から解決する最新の研究手法・科学的分析能力を獲得する。</u></p>	<p><u>アスレティックリハビリテーションの対象となるスポーツ外傷・障害に関する機能評価およびプログラムについてディスカッションする。最新の学術的知見を基に、アスレティックリハビリテーションの現状の課題を明確にし、これらをスポーツ医科学の視点から解決する研究手法について検討・実践する。</u></p>
<p>「スポーツ栄養学特殊研究」  近年、スポーツ栄養学分野の研究は、現象論にとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。<u>本講義は、身体活動の増加に伴い生じる生化学的・生理的応答に対して栄養学の観点から最新のエビデンスに基づき、スポーツ栄養学の知見を深めると同時に、国内外におけるスポーツ栄養学分野の研究動向を理解する。スポーツ栄養学分野における新規性及び独自性が高い研究活動を探求し、人々の健康増進及びパフォーマンス向上の貢献に寄与する活動を遂行できる能力を修得する。また、パフォーマンス向上に欠かせない栄養サポート技術を実践的に考究する。</u></p>	<p>「スポーツ栄養学特殊研究」  近年、スポーツ栄養学分野の研究は現象論までにとどまらず、細胞レベルでのメカニズムの解明が求められている。<u>本講座はスポーツ科学と栄養学の両方を組み合わせ、スポーツ競技を現象論からメカニズムまで網羅するべく先行研究を熟読する。そこから得られた知見を整理し、新たな問題点と向き合い研究・考察していく。そこで得られた結果について多角的に討論していく。</u></p>



(3) 審査意見を踏まえ、各科目のシラバスの「成績評価の方法」について、具体的な内容が明確となるよう「補足」または「その他」の欄にそれぞれ追記した。

1) 「スポーツ医科学特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 2)

「成績評価の方法」 その他 10%

補足欄

適切な発言力、知識の応用力など

2) 「スポーツ生理学特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 3)

「成績評価の方法」 実技試験 50%

その他欄

「実技試験」とは、講義や学会発表の形式をとり、プレゼンテーションの能力を評価する。

3) 「スポーツバイオメカニクス特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 4)

「成績評価の方法」 作品評価 50%

その他欄

「作品評価」とは、バイオメカニクス研究を行う上で必要な専門的知識や技能について、レポートやプレゼンテーションにまとめ、他者に伝達することができる能力を評価する。

4) 「健康運動科学特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 11)

「成績評価の方法」 作品評価 40%

その他欄

「作品評価」とは、プレゼンテーションのスライド作成を評価する。

5) 「冬季スポーツ指導特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 13)

「成績評価の方法」 実技試験 60%

その他欄

「実技試験」とは、高度なスキー技術指導能力を有しているかを評価します。

(4) 審査意見を踏まえ、「被験講義」が不明確であったため、下記内容をシラバスの「その他」欄に記載した。

「健康運動科学特殊研究」 授業計画 (シラバス) (p. 11)

その他欄

「被験講義」とは、自らの実験・測定者の立場だけではなく、被験者として他者の実験の参加経験や被験者に対する説明方法、実施及び評価過程を学ぶ講義を指す。

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

4. <研究科委員会規程に齟齬(そご)>  
 博士論文の合否判定については、研究科委員会で行うこととなっているが、研究科委員会規程における本委員会の審議事項に記載がなく、齟齬(そご)がある。このため、研究科委員会規程を適切に改めること。

(対応)

審査意見を踏まえ、研究科委員会規程の審議事項として、第5条第1項第6号に「修士論文及び博士論文の審査に関する事項」を加え、併せて関係箇所を修正した。

(新旧対照表) 北翔大学大学院 研究科委員会規程 (p.1)

新	旧
<p>(審議事項)</p> <p>第5条 学則第9条第1項第3号に定める事項は次のとおりとする。</p> <p>(略)</p> <p><u>(6) 修士論文及び博士論文の審査に関する事項</u></p> <p><u>(7) その他学長が必要と認めた事項</u></p>	<p>(審議事項)</p> <p>第5条 学則第9条第1項第3号に定める事項は次のとおりとする。</p> <p>(略)</p> <p><u>(6) その他学長が必要と認めた事項</u></p>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p.32)

新	旧
<p>さらに、北翔大学大学院研究科委員会規程では学則第9条第1項第3号の学長が定めるものとして、①学則、その他教育研究に関する諸規程の制定・改廃に関する事項、②教育課程の編成、実施及びその改善に関する事項、③学生の除籍、復籍に関する事項、④聴講生、科目等履修生及び研究生等に関する事項、⑤学生の賞罰に関する事項、<u>⑥修士論文及び博士論文の審査に関する事項</u>、<u>⑦その他学長が必要と認めた事項</u>、と規定している。</p>	<p>さらに、北翔大学大学院研究科委員会規程では学則第9条第1項第3号の学長が定めるものとして、①学則、その他教育研究に関する諸規程の制定・改廃に関する事項、②教育課程の編成、実施及びその改善に関する事項、③学生の除籍、復籍に関する事項、④聴講生、科目等履修生及び研究生等に関する事項、⑤学生の賞罰に関する事項、<u>⑥その他学長が必要と認めた事項</u>、と規定している。</p>

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

5. <英語能力判定の位置付けが不明確>

入学者選抜で求める英語能力の判定について、「TOEIC または TOEFL のスコアから判定する」とのことだが、新たに学力試験を実施する計画ではなく、アドミッション・ポリシーに英語能力に係る記載がないことに鑑みれば、出願時点で一定水準のスコアを有することを受験資格として求めているようにも見受けられる。このため、当該判定が、入学者選抜における受験資格として受験者に求めるものなのか、選考方法の一つとして設定されたものなのか明確に説明すること。また、英語スコアが受験資格である場合は、具体的な水準を明示すること。

(対応)

英語能力の判定は、受験資格として定めたものではなく、入学後に英語論文を精読できる能力を評価するための選考方法の一つとして設定した。受験者は、出願時に TOEIC または TOEFL のスコアを提出し、スコアに基づき、博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を有するかを判定することを明記した。

また、アドミッション・ポリシーに、「博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を有すること」を加筆した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 29)

学生の確保の見通し等を記載した書類 (資料) (p. 10)

新	旧
<p><b>【アドミッション・ポリシー】</b></p> <p>運動やスポーツ、健康に関する学術研究や科学的知識及び専門的技能を有する人材を求める。スポーツを科学的に分析する能力を有する人材や、生涯スポーツ活動の推進や健康増進のための研究能力を有する人材を受け入れる。また、<u>博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を有すること</u>。なお、<u>スポーツ競技者へのセカンドキャリア、コーチ・指導者へのリカレント教育、保健体育科教員の高度専門化の観点から、社会人の入学を積極的に受け入れる。</u></p>	<p><b>【アドミッションポリシー】</b></p> <p>運動やスポーツ、健康に関する学術研究や科学的知識及び専門的技能を有する人材を求める。スポーツを科学的に分析する能力を有する人材や、生涯スポーツ活動の推進や健康増進のための研究能力を有する人材を受け入れる。また、スポーツ競技者へのセカンドキャリア、コーチ・指導者へのリカレント教育、保健体育科教員の高度専門化の観点から、社会人の入学を積極的に受け入れる。</p>

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 29)

新	旧
<p>①英語能力の判定</p> <p><u>受験者は、出願時に TOEIC または TOEFL のスコアを提出する (試験日の 2 年前までのスコアを有効とする)。提出されたスコアに基づき、博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を有するかを判定する。入学後に英語論文を精読することのできる能力の評価となる。すなわち、TOEIC または TOEFL のスコアは英語能力の判定のために利用し、入学者選抜方法の一つとして設定する。</u></p>	<p>①英語能力の判定</p> <p><u>博士後期課程の研究を遂行するために必要な英語能力を、TOEIC または TOEFL のスコアから判定する。入学後に英語論文を精読することのできる能力を評価する。なお、TOEIC または TOEFL のスコアは、試験日の 2 年前までを有効とする。</u></p>

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

6. <機器備品の利用計画が不明確>

本学が既に整備している、多用途筋機能評価運動装置をはじめとした機器備品について、既設の学部や修士課程との共用の有無など、本課程の教育研究上支障のない利用計画となっているか明確に説明すること。

(対応)

本学が既に整備している機器備品について、本課程の教育研究上支障のない利用計画となっているかを説明するために、それらの機器備品の設置場所、使用時間、使用日数、平均使用時間を調査し、資料 24 に追加した。平成 30 年度の各機器備品の利用時間についてみると、光学式三次元動作分析装置、床反力計は年間使用時間が 288 時間、年間使用日数は 144 日で、一日平均では 2 時間であった。多用途筋機能評価運動装置、呼気ガス分析器、大型トレッドミル、脳波計測装置、簡易低酸素・高酸素室、高温トレーニング室、人工気象室の年間使用時間は 1,137 時間、年間使用日数は 216 日であり、1 日平均 5 時間であった。体脂肪計測装置、血圧脈波検査装置の年間使用時間は 316 時間、年間使用日数は 60 日で、1 日平均では 5 時間であった。博士後期課程においても既存の機器備品を共有することを予定していることを明記し、これまでも学内における日程調整により共有がなされており、博士後期課程設置後においても、教育研究活動に支障をきたさず、十分、共有可能であることを明記した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 25)

新	旧
<u>これらの機器備品は、学部における専門演習や卒業研究、修士課程における特別研究指導、ならびに北方圏生涯スポーツ研究センター (スポル) の研究活動において使用されている。平成 30 年度の使用状況を資料 24 に示す。光学式三次元動作分析装置、床反力計は年間使用時間が 288 時間、年間使用日数は 144 日で、一日平均では 2 時間である。多用途筋機能評価運動装置、呼気ガス分析器、大型トレッドミル、脳波計測装置、簡易低酸素・高酸素室、高温トレーニング室、人工気象室の年間使用時間は 1,137 時間、年間使用日数は 216 日であり、1 日平均 5 時間である。体脂肪計測装置、血圧脈</u>	<u>博士後期課程の院生が研究活動を遂行するにあたり、運動やスポーツなどの身体動作を科学的・定量的に分析できる研究機器備品を新たに整備する。新規で購入する機器備品は下記の通りである。設置場所は本研究科の多目的演習室とする。</u>

<p><u>波検査装置の年間使用時間は 316 時間、年間使用日数は 60 日で、1 日平均では 5 時間である。</u></p> <p><u>博士後期課程においてもこれらの機器備品を共有することを予定している。これまでも学内における日程調整により共有がなされており、博士後期課程設置後においても、教育研究活動に支障をきたさず、十分、共有可能である。</u></p> <p>(略)</p> <p><u>【資料 24：既存の機器備品使用状況】</u></p>	
--	--

**資料 24：既存の機器備品使用状況**

機器備品	設置場所	使用時間 (時間/年)	使用日数 (日/年)	平均使用時間 (時間/日)
光学式三次元動作分析装置	多目的実習室	288	144	2.0
床反力計	多目的実習室			
多用途筋機能評価運動装置	第一測定室	1137	216	5.3
呼気ガス分析器	第一測定室			
大型トレッドミル	第一測定室			
脳波計測装置	第一測定室			
簡易低酸素・高酸素室	第一測定室			
高温トレーニング室	第一測定室			
人工気象室	第一測定室			
体脂肪計測装置	第二測定室	316	60	5.3
血圧脈波検査装置	第二測定室			

(是正事項) 生涯スポーツ学研究科 生涯スポーツ学専攻 (D)

7. <学位名称の適正性が不明確>  
学位名称について、日本語名称を「博士 (スポーツ科学)」、英語名称を「Doctor of Philosophy」としているが、修士課程の学位名称がそれぞれ「修士 (スポーツ科学)」、「Master of Sport Sciences」となっていることも踏まえ、その適正性について明確に説明すること。

(対応)

学位の日本語名称を「博士 (スポーツ科学)」の根拠について、本研究科が対象とする学問分野がスポーツ医学・スポーツ生理学・スポーツバイオメカニクス・スポーツ栄養学・スポーツ心理学・生涯スポーツ学・スポーツ老年学・健康運動科学・コーチ学・スポーツ教育学等であることを明記し、これらの学問分野及び教育研究内容は、広義的には「スポーツ科学」であることを記載した。また、修士課程の学位名称が「修士 (スポーツ科学)」であり、修士課程との統一性・連続性についても明記した。

英語名称を「Doctor of Philosophy」としていたが、「Doctor of Philosophy in Sport Sciences」とした。「Doctor of Philosophy」とした理由として、諸分野における博士の学位を示すものとして、国内外において使用されており学術的にも広く認知されている表記であることを明記した。

また、学位に併記する専門分野を明確にするために、「in Sport Sciences」を追記した。英語表記については、修士課程の英語表記が「Master of Sport Sciences」となっていることを勘案し、「Sport Sciences」とした。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (p. 12)

新	旧
<p>研究科・専攻の名称は、既設の修士課程の名称を継承し、「生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程」とする。<u>地域特性を反映した北海道及び冰雪寒冷圏域の住民が生涯にわたってスポーツ活動と健康づくりを実施できる生涯スポーツ社会の発展に貢献できる人材を養成することを研究科の目的とするためである。</u></p> <p><u>研究科名称の英語表記は「Graduate School of Lifelong Sport」、専攻名称を「Doctoral Program in Lifelong Sport Sciences」とした。この「生涯スポーツ」の</u></p>	<p>研究科・専攻の名称は、既設の修士課程の名称を継承し、「生涯スポーツ学研究科生涯スポーツ学専攻博士後期課程」とする。北海道及び冰雪寒冷圏域の住民が生涯にわたってスポーツ活動と健康づくりを実施できる生涯スポーツ社会の発展に貢献できる人材を養成することを研究科の目的とするためである。</p> <p><u>学位名称を「博士 (スポーツ科学)」とする。学位名称については、生涯スポーツの発展・体系化に対して本研究科が扱う学問分野及び教育研究内容が、広義的には「ス</u></p>

<p>英語表記は、学術団体「日本生涯スポーツ学会」の「Japanese Society of Lifelong Sport」に倣った。</p> <p><u>学位名称は「博士（スポーツ科学）」とする。本研究科では、スポーツ医学・スポーツ生理学・スポーツバイオメカニクス・スポーツ栄養学・スポーツ心理学・生涯スポーツ学・スポーツ老年学・健康運動科学・コーチ学・スポーツ教育学等の学問分野及び教育研究内容による学際的アプローチにより生涯スポーツの発展・体系化を目指す。これらの学問分野及び教育研究内容は、広義的には「スポーツ科学」であることと、学位名称の国内・国際的通用性を鑑みて、学位に付記する専攻分野の名称を「スポーツ科学」とした。また、修士課程の学位名称が「修士（スポーツ科学）」であり、修士課程との統一性・連続性も考慮した。</u></p> <p><u>学位の英語表記は、「Doctor of Philosophy in Sport Sciences」とした。</u></p> <p><u>「Doctor of Philosophy」は、諸分野における博士の学位を示すものとして、国内外において使用されており学術的にも広く認知されている表記である。この学位に併記する分野に関しては、修士課程の英語表記が「Master of Sport Sciences」となっていることを勘案し、「Sport Sciences」とした。</u></p> <p>研究科名称：生涯スポーツ学研究科：Graduate School of Lifelong Sport  専攻名称：生涯スポーツ学専攻博士後期課程：Doctoral Program in Lifelong Sport Sciences  学位名称：博士（スポーツ科学）：Doctor of Philosophy in Sport Sciences</p>	<p><u>「スポーツ科学」であることと、学位名称の国内・国際的通用性を鑑みて、学位に付記する専攻分野の名称を「スポーツ科学」とした。また、修士課程の学位名称が「修士（スポーツ科学）」であり、修士課程との統一性・連続性も考慮した。</u></p> <p><u>標記各名称の英語表記は下記の通りである。「生涯スポーツ」の英語表記は、学術団体「日本生涯スポーツ学会」の「Japanese Society of Lifelong Sport」に倣った。</u></p> <p>研究科名称：生涯スポーツ学研究科：Graduate School of Lifelong Sport  専攻名称：生涯スポーツ学専攻博士後期課程：Doctoral Program in Lifelong Sport Sciences  学位名称：博士（スポーツ科学）：Doctor of Philosophy</p>
---	---